

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00681

研究課題名(和文) 複言語・複文化主義に基づいたシティズンシップ教育としての日本語教育

研究課題名(英文) Japanese language education as citizenship education based on plurilingualism and pluriculturalism

研究代表者

森山 新 (MORIYAMA, Shin)

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：10343170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により二度の大戦の悲劇を教訓に複言語・複文化主義に基づき欧州が導き出したシティズンシップ教育としての外国語教育が、東アジアでも有効なことが、理論的、実践的に示された。理論的にはByram(2008)の「間文化的シティズンシップ教育としての外国語教育」、Barrett(2016)の「民主的文化のための能力の参照枠」、Barnett(1997)の「クリティカルな存在」、Allport(1954)の「接触仮説」などの理論を援用、理論的枠組みを策定し、それを日韓大学生国際交流セミナーや複言語・複文化教育プログラム、国際学生フォーラム、国際合同遠隔授業などを通してその有効性が検証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、欧州で開発された間文化的シティズンシップ教育の東アジアに用いた場合の有効性を理論的のみならず、実践的アプローチからも確認したことである。特に東アジアにはヨーロッパと共通する面のみならず異なる面も存在しているが、こうした東アジアにおけるシティズンシップ教育を行う上で、どのような実践が必要か、教師の役割も含めて明らかにした。また、社会的にはヨーロッパとは異なり、大戦によってもたらされた対立が今なお克服できずにいる東アジアにおいて、特に必要な能力とはどのようなものかという点について、RFCDCの枠組みなどをいながら具体的に提案し、東アジアがともに生きるための道を提言できたことである。

研究成果の概要(英文)：This study has shown from theoretical and practical standpoints that foreign language education as citizenship education, which Europe established after the tragedy of the two World Wars and based on plurilingualism and pluriculturalism, is also effective in East Asia. Theoretically, frameworks were formulated, drawing on Byram's (2008) 'foreign language education as intercultural citizenship education', Barrett's (2016) 'Reference Framework of Competence for Democratic Culture (RFCDC)', Barnett's (1997) 'critical being', Allport's (1954) 'Contact Hypothesis' and other theories. The effectiveness of the frameworks was verified through various educational practices, including the Japan-Korean International Student Seminar, the Plurilingual and Pluricultural Education Program, the International Student Forum and international joint remote classes.

研究分野：日本語教育関連

キーワード：複言語主義 複文化主義 間文化的シティズンシップ教育 東アジア 日本語教育 外国語教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の欧州の言語教育は、東アジアの外国語教育にも様々な示唆を与えてくれる。Byram(2008)は、外国語教育は、そのナショナルな視点を脱中心化・相対化し、超国家的なアイデンティティ構築に寄与するとしている(第三次社会化)。また国家や文化を超えたアイデンティティ構築には、外国語教育が言語教育だけでなく、文化・政治教育を取り込む必要性を主張している。もしこれが事実なら、このような外国語教育の推進は、東アジア諸国がともに生きるために必要な、超国家的アイデンティティやシティズンシップ構築に寄与する可能性がある。

欧州に比べ東アジアでは、「ともに生きる」ための外国語教育のあり方についての研究や具体的実践は不足している。また東アジアが置かれた状況は、欧州とは様々に様相を異にしており、欧州をコンテクストに得られた研究・実践の成果をそのまま東アジアに活用することができるのか、できないとすれば、東アジアの特殊事情を考慮し、どのような変更を加える必要があるのか、などの点を明らかにする必要がある(森山, 2016)。

### 2. 研究の目的

周知の通り、日韓、日中の間には今なお歴史的な感情が根強く残っており、対立の原因ともなっている。これまでの日本語教育では、「文化」を扱い、理解する異文化理解教育を行うことはあっても、政治的、歴史的な問題を授業の中で積極的に扱い、対話し、理解することは、センシティブな問題であるために「タブー」として避けられる傾向があった。しかし本研究では、こうしたタブーこそ対話が必要であり、また対話にこそ学んだ言語が必要であると考えられる。またそのようなトピックを扱うには、Byram が語るように、言語スキルのみを教えるだけでは十分でなく、自国・自文化中心の視点を脱中心化し、他者を理解する超国家的な視点を育む必要がある。以上から本研究では、学んだ外国語(日本語)を他者理解のためのコミュニケーションのツールとして活用し、「ともに生きる」ための対話を行うとともに、東アジアという超国家的アイデンティティとシティズンシップを構築するような日本語教育のあり方を確立することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、第一に理論的アプローチと実証的アプローチとを用い、第二に東アジアの知見と欧州の知見とを合体させることで、今日もなお東アジアが抱える困難解決の糸口を、日本語教育の理論と実践の両面から明らかにする。その上で、シティズンシップ教育としての日本語教育のあり方を具体的に提案した。最終的には日本語教育で得られた知見を韓国語や中国語教育にも生かし、さらにそれらを複言語・複文化教育として収斂させ、東アジアの共生や、欧州のような共同体建設をも視野に入れ、その言語教育政策を構築する第一歩としていきたいと考えている。

研究の分担については表の通りである。まず、東アジアの日本語教育をシティズンシップ教育として提案するには、欧州が実施してきた教育的提案を参考にすることが有効である。この点については分担者(山本)の協力を得る。また代表者(森山)の実践は日韓が中心となっており、ここで得られた知見を、中国を含め東アジア全体に展開していく必要がある。日中間には社会体制が異なるというもう一つの壁が存在し、それが「対話による和合」を阻む可能性もある(実際、森山が行った国際遠隔授業ではそのような課題に直面し、十分な対話が実現できなかった)。そのためこの点については分担者(李)の協力を仰ぐことにした。

| 担当者     | 理論的展開                               | 実践的展開    |
|---------|-------------------------------------|----------|
| 森山(代表者) | 東アジアにおける間文化的シティズンシップ教育としての日本語/外国語教育 | 日本・韓国・中国 |
| 山本(分担者) | 欧州から東アジアへの応用可能性                     | 欧州・日本    |
| 李(分担者)  | 日韓から中国を含めた東アジアへの拡大                  | 中国・日本    |

### 4. 研究成果

#### (1) 理論的アプローチ

本研究が用いた理論的枠組みは、主に Byram (2008) の提唱する「間文化的シティズンシップ教育としての外国語教育」である。また、間文化的シティズンシップ教育を評価する理論としては、Byram (2008: 212-213) の 5 段階の評価基準、Barnett (1997) の「クリティカルな存在 (Critical being)」の尺度、Barrett (2016) の「民主的文化のための能力の参照枠 (Reference Framework of Competence for Democratic Culture: 以下、RFCDC)」などである。

教師の役割を考えるにあたっては、Allport (1954) の「接触仮説 (Contact Hypothesis)」やその後続のモデル(例えば「脱カテゴリー化モデル (Decategorization Model; Brewer & Miller, 1984)」、「相互差異化モデル (Mutual Differentiation Model; Hewstone & Brown, 1986)」、「共通内集団アイデンティティモデル (Common Ingroup Identity Model; Gaertner, Dovidio et al., 2000)」)さらには、世界の紛争解決のために様々なワークショップを行っている Burton, Kelman らの研究を参考にした(例えば Burton et al., 1990)を活用した。さらに論争上の話題をどう教えるかについては、Council of Europe (2015) を参考にした。

## (2) 実践的アプローチ

本研究で行った「間文化的シティズンシップ教育としての外国語教育」に関する教育実践としては、以下のようなものが挙げられる（詳しくはそれぞれを扱った森山の以下の研究を参照）。

日韓大学生国際交流セミナー

森山新(2019a)「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」『人文科学研究』, 15, 121-134

森山新(2019b)「東アジアのインターカルチュラル・シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育プログラム: その成果と課題」『高等教育と学生支援』, 9, 1-11

森山新(2020a)「間文化的シティズンシップ教育としての日本語教育: 第10回日韓大学生国際交流セミナーでの韓国側学生の変容より」『人文科学研究』, 16, 67-79

森山新(2023a)「日韓がともに生きるためのシティズンシップを育む: 対話・交流型授業実践を通して」『ことばの教育と平和』, 265-303, 明石書店

複言語・複文化教育プログラム

森山新(2019b)「東アジアのインターカルチュラル・シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育プログラム: その成果と課題」, 『高等教育と学生支援』, 9, 1-11

国際学生フォーラム

森山新(2021)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析 - 民主的文化のための能力の参照枠(RFCDC)の観点から-」『人文科学研究』, 17, 25-38

森山新(2022a)「間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: 政治教育的側面、及び複言語・複文化教育的側面からの考察」『人文科学研究』, 18, 55-68

森山新(2023b)「間文化的シティズンシップ教育としての第11回国際学生フォーラム: 民主的文化のための能力の参照枠を尺度として」『人文科学研究』, 19, 27-41

国際合同遠隔授業

森山新(2020b)「東アジアが共に生きるためのシティズンシップ教育: ABCモデルに基づいた教育実践からの考察」『高等教育と学生支援』, 10, 1-14

森山新(2024a)「間文化的シティズンシップ教育としての日韓合同遠隔授業: 民主的文化のための能力の参照枠を尺度として」『人文科学研究』, 20, 41-54

## (3) 間文化的シティズンシップ教育としての日本語教育への示唆

Byramの観点から

まず Byram の観点からは、第一に、「異なる他者との協働の場」を提供することの重要性である Byram (2008) では、シティズンシップが5段階のステップで育成されていくための前提として「他者と関わり」、協働する必要があることが示されている。本研究で実施されてきた教育実践のいずれもが、学習言語を用いながら交流型授業、対話型授業の形で実施される中、異なる他者と関わり対話し、協働することが求められており、いずれにおいても間文化的シティズンシップ教育としての成果が上がっていた。この前提は Allport (1954) の「接触仮説」とも合致している。また、間文化的な環境でともに行動することも「政治的段階」に至る上で重要である。

第二に、対話のための共通の基盤を構築する役割である。Byram (2008: 173-176) によれば、対話のための共通の基盤として欧米が当然のごとく仮定しているのは民主主義の理念であるが、この対立の絶えない東アジアの場合には、この民主主義すら対話のための共通の基盤とはなり得ない可能性があるとして述べられている。東アジアの国々を例に挙げると、中国は日本や韓国とは異なる政治体制を有し、前提となる民主主義の考え方が異なっている。中国では西欧型の民主主義ではなく、マルクス主義に基づいた民主主義を唱えている。このことから、日中間で対話を行うには、対話のための共通の基盤をどう設定するかから対話を始める必要がある。この点について Byram は、主に欧米で唱えられることの多い「普遍主義」でも、中国など東アジアで唱えられる可能性のある「相対主義」でも対話の見込みは低いと述べ、最終的に「多元主義」の立場から互いの差異に理解を示し、体系化するアプローチが有効であるとしている。但しこの点については、目下研究途上にあり、この点については次の科研(22K00759)に委ねたい。

第三に、複言語・複文化環境を設定することである。Allport(1954)の接触仮説の条件の1つ、「対等な立場」を保証する上で何語を媒介言語とするかは、対等性の面で重要であるためである。同時に、複言語学習、とりわけ相手言語の学習は、モノリンガルが陥りやすい、自文化、自国中心の視点を乗り越え、言語・文化を超えた間文化的パースペクティブや超国家的アイデンティティ形成においても重要である (Byram, 2008: 133-137)。

第四に、政治的にセンシティブな話題を扱うことの重要性である。政治的にセンシティブな話題は、アイデンティティの対立を誘発する危険性もあるが、対立のリスクを克服することで、加害者と被害者との関係が克服されると同時に、仲介能力や対話能力が向上させる効果があった。さらに超国家的なアイデンティティや間文化的シティズンシップを育むことができた。

Barnett の観点から

次に Barnett の観点からの示唆を述べる。Barnett (1997) はグローバル時代に求められる「クリティカルな存在」となるには、これまで大学などの高等教育機関が重視してきた「知識(思考)」面だけでなく、「自己(内省)」「世界(行動)」の面を加え、3つの領域でクリティカルな態度を育むべきであるとした。本稿で紹介した実践は、全体としては「知識(思考)」「自己(内省)」面においてはある程度の達成が見られたが、「世界(行動)」の面の成果は、教室内の討論や発表、

オンライン上での発信という範囲にとどまった。

RFCDC の観点から

RFCDC の観点からは、本研究で行った東アジアを文脈としたシティズンシップ教育での実践でも、これら能力が育まれることが確認できた。但し、異なる政治体制が存在し、今日もなお過去の対立を克服できずにいる東アジアにおいて、特に要求される能力とはどのようなものかについて、今後より具体的に明らかにすることができれば、日韓もしくは東アジアによりふさわしい「民主的文化のための能力の参照枠」を提示することが可能となる。

例えば、第一の「価値」の領域においては、東アジアでは政治体制等の違いにより、人権、民主主義、平等、法の支配などにおいて、異なる見解が存在している。それらについて、欧米の価値観を東アジア各国に普遍化し、共通の考え方としてもいいのか（普遍主義）それともある程度、歴史的、文化的背景を考慮し、文化・価値観の多様性として受容すべきなのか（相対主義）についてはこれまでも東西、そして国家間でも意見が分かれており、まずは多元主義に立って慎重に議論されるべき問題であろう。第二の「態度」の領域においては、過去の歴史に対する当事者意識を持つことは、今も対立の続く東アジアにおいては重要であろうし、加害者国であった日本においては特に必要であると思われる。具体的には、日本側学生が、当事者意識を持ちながら、過去の日本の加害行為に対する責任感や市民意識を持つべきか、集合的罪意識は当事者でない戦後生まれの我々国民も持つ必要があるのかなど、十分検討する必要がある。韓国側学生もまた、被害者の立場が増幅され、「犠牲者意識ナショナリズム（林, 2022）」とならないようにしなければならぬ。また、異なる見解を持つ他者との対話においては、自身が加害者側であろうと被害者側であろうと、開放的態度や相手に対する敬意、解釈の不一致に対する寛容さなどが、欧米国家間の対話以上に求められよう（Reykowski & Cislak, 2011）。第三の「スキル」においては、異なる意見を持つ他者との対話に必要な様々なスキル、とりわけ分析的・批判的思考、異なる他者の意見に耳を傾けたり、共感したりするスキル、柔軟性・適応力、対立解決のスキルなどが求められる。さらに日韓、日中いずれにおいても母語や文化を異にするため、複言語・複文化能力も求められよう。第四の「知識と批判的理解」では、自己の無意識な偏見やバイアスなどに気づき、調整する、自己に関する知識や批判的理解、世界の対立をクリティカルに見つめ、その原因は何か、どうすれば解決できるのか、などに関する知識や批判的な理解が、とりわけ東アジアを文脈とした場合には求められよう。

教師の役割

続いて、教師の役割についての示唆を述べる。第一が対話の場を創造する役割である。Allport は接触の 4 条件の 1 つに、社会的・制度的支援を挙げているが、これには教師が対話のための良質な環境を整備することを含む。我々言語教師はコミュニケーションの専門家としてその役割を担うに最適である。実際の教育実践でも我々教師がこうした専門性を発揮することで、学生たちは対話に成功し、様々な誤解や葛藤を超え困難な問題も対話により解決できるという成功体験を付与できた。また、政治や歴史が専門ではない教師が指導に当たることによって、学生たちは教師に回答を求めなくなり、自分たちで主体的に回答を模索する自律学習の促進にも寄与していた。つまり、実践を担当する教師は必ずしも扱うテーマの専門家である必要はなく、コミュニケーションの専門家として良質な対話の場を提供すること、教師の役割は、対話のパターンを示し、問題解決を支援することが重要である。

論争上のセンシティブな問題の扱い方

続いて、論争上のセンシティブな問題の扱い方について、本研究で行った諸実践では、教師は意見を述べることを控え、学生たちの自律学習に委ねることにした。ただしこれらの実践では日韓など、対立を抱える 2 つの集団間の対話を促し解決することをめざしていたため、教員は学生が自身の考えを相対化したり、自他の意見を客観的、批判的に分析したりすることを促す目的で、相手側が主張するであろう論点等について、あらかじめ教師が代弁して紹介することはした。これは、Council of Europe（2015）の反対意見を述べる立場、に近いかもしれない。しかし対立を抱えるこちら側のグループに対し、相手グループの見解を予め示すという意味では、味方アプローチとも言える。日本においては、異なる他者、すなわち韓国側の意見は弱い立場、少数派の立場になるためである。これについては、実際に対話を行う前に、自分の意見を相対化し、自他の意見をクリティカルに見つめる機会を与え、健全な議論を導く利点があった。

#### (4) 間文化的シティズンシップ教師としての我々の役割

外国語教室こそシティズンシップ教育の最適な場であること、言語・文化を超えた対話・コミュニケーションのスキル育成は我々の専門とする分野であり、我々は自信を持って取り組むべきであること、高等教育機関は世界を変えるクリティカルな存在を育む場であること、などを考えれば、我々こそがこのミッションの先頭を歩まなければならないと考えている（森山, 2024b）。

#### (5) 欧州から東アジアへの応用可能性（山本冨里）

外国語学習の際、目標言語と、自分が既にレパートリーに持つ言語との類縁性を利用すれば学習は進みやすい。分担者山本は、これを利用して欧州で展開されてきた Intercomprehension 教育について学び、東アジアへの応用可能性を検討した。具体的には「中国語話者が、日本に留学して初めて日本語を学ぶ場合」を対象に、効果的学習（漢字利用）をばむ構造的要因を探った。

なぜ、漢字が有効利用されないのか。その要因は「教師養成講座での教授内容」「初級教室で

使われる文字種」「教師の言語レパートリー」「学習者のレパートリー」の4種である。

日本語教師養成講座での教授内容には、類縁性を活かすという視点は、通常含まれていない。日本語教師の言語レパートリーに中国語が含まれることはごく少ない。ひとつの教室にも、漢字を知悉する人とまったく学んだことがない人が混在するため、初級の最初の段階では、漢字は避けられることが多い。のちに漢字が導入されても、中国語との重なりや相違点を考慮した提出順ではない。このような要因およびあり得る活路について、2月に京都大学で行われた国際研究集会「複言語教育の横断性を考える」で発表した。

また、「ともに生きる」ための言語学習において中核となる（と山本は考える）価値として、能力としての複言語主義を、二重の単一言語主義が強い日本において普及するための書籍執筆を開始した。書籍は2025年中に大手出版社から出版されることがすでに決定している。

#### (6) 日韓から中国を含めた東アジアへの応用可能性の拡大（李曉燕）

中国に応用する際、政治的要素を考慮しなければ推進は難しいが、政治体制の違いだけで中国を排除することは適切でない。以下に、具体的提案を述べる。

第一に多言語主義の推進である。欧州では複言語を学ぶことが一般的である。中国では大学進学競争が激しく、日本語を含め、英語以外の外国語教育が進んでいる。

第二に言語教育の質の向上である。欧州ではCLIL（内容言語統合型学習）などを採用、教科内容と外国語を同時に学ぶことで実践的な言語能力を高めている。中国でも、同様の方法を取り入れており、科学や歴史などの教科を外国語で教えるプログラムが導入されている。

第三に異文化コミュニケーションの促進である。中国では、国内外の学生や教育者の交流プログラムを増やすことで、異なる文化や視点を持つ人々が相互に学び合う機会を提供している。これにより、多様性の理解が深まり、新しい知見やイノベーションが生まれる可能性が高まっている。特に、「一帯一路」政策の影響で「一帯一路言語文化組織（ロシア、イタリア、タイ、シンガポール、マレーシア、モンゴル）」などが設立され、国際的な言語教育の連携が進んでいる。

第四に少数民族言語の保護である。欧州では、少数民族の言語保護が法的に保障されており、教育やメディアでの使用が奨励されている。中国では少数民族の言語を保護・促進する政策の強化が求められ、これにより、文化的多様性の維持と少数民族のアイデンティティの尊重が図れる。

第五に外国語教育におけるAI技術の活用である。中国では、AI技術と言語教育の統合が進んでおり、学際研究が注目されている。中国は高等教育への予算を増やしており、世界的に著名な研究者を招くことが多く、AI技術を活用した教育方法の検討が進められている。今後、AI技術を生かした「共に生きる」教育方法の導入が期待される。

#### <引用文献>

- Allport, G. W. (1954). *The Nature of Prejudice*. NY: Addison-Wesley.
- Barnett, R. (1997). *Higher education: A critical business*. McGraw-Hill Education (UK), 1997.
- Barrett, M. D. (2016). *Competences for democratic culture: Living together as equals in culturally diverse democratic societies*. Council of Europe Publishing.
- Brewer, M. B., & Miller, N. (1984). Beyond the contact hypothesis: Theoretical Perspectives on Desegregation. *Groups in contact: The psychology of desegregation*, 281-302. FL: Academic Press.
- Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for international citizenship*. Clevedon: Multilingual Matters. (パイラム・マイケル (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店)
- Council of Europe. (2015). *Teaching Controversial Issues*. <https://edoc.coe.int/en/> (最終参照 2023年8月3日)
- Gaertner, S. L., Dovidio, J. F., Banker, B. S., Houlette, M., Johnson, K. M., & McGlynn, E. A. (2000). Reducing intergroup conflict: From superordinate goals to decategorization, recategorization, and mutual differentiation. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, 4(1), 98-114.
- Hewstone, M., & Brown, R. (1986). Contact is not enough: An intergroup perspective on the contact hypothesis. *Contact and conflict in intergroup encounters*, 1-44, Oxford: Basil Blackwell.
- 林志弦 (2022) 『犠牲者意識ナショナリズム：国境を超える記憶の戦争』, 東洋経済新報社.
- 森山新 (2016) 「序章 第二言語としての日本語習得研究：その過去・現在・未来」 「第11章 韓国における第二言語としての日本語習得研究」 「第15章 シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育」 森山新・向山陽子編著 『第二言語としての日本語習得研究の展望：第二言語から多言語へ』 東京：ココ出版, pp.1-21, 325-348, 413-443.
- 森山新 (2024b) 「間文化的シティズンシップ教育としての日本語教育-韓国と日本の過去克服と和解のために-」, 『日本語教育研究』, 66, 7-23.
- Reykowski, J. & Cislak, A. (2011). Socio-psychological Approaches to Conflict Resolution. *Intergroup conflicts and their resolution: A social psychological perspective*, 241-266.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森山新  | 4. 巻<br>19          |
| 2. 論文標題<br>間文化的シティズンシップ教育としての第11回国際学生フォーラム：民主的文化のための能力の参照枠を尺度として | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>27-41 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                    | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                            | 国際共著<br>-           |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>森山新                          | 4. 巻<br>Vol.1-4    |
| 2. 論文標題<br>韓国と日本、過去の克服と和解のために          | 5. 発行年<br>2023年    |
| 3. 雑誌名<br>韓日新時代フォーラム講演集                | 6. 最初と最後の頁<br>5-50 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森山新  | 4. 巻<br>18          |
| 2. 論文標題<br>間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析：政治教育的側面、及び複言語・複文化教育的側面からの考察 | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>55-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                                | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>山本冴里  | 4. 巻<br>19            |
| 2. 論文標題<br>崖っぶちの向こう側に踏み出して センシティブなテーマを扱ったコミュニケーション教育の実践研究 | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>言語文化教育研究  | 6. 最初と最後の頁<br>131-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14960/gbkkg.19.131          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                     | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>山本冴里・富本浩一郎                           | 4. 巻<br>9           |
| 2. 論文標題<br>日本の就学前幼児を対象とする「言語への目覚め活動」教材作成と試用の結果 | 5. 発行年<br>2022年     |
| 3. 雑誌名<br>複言語・多言語教育研究                          | 6. 最初と最後の頁<br>65-81 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                 | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)          | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Li, Xiaoyan  | 4. 巻<br>4(3)          |
| 2. 論文標題<br>"The Possibility of Intercultural Citizenship Education: A Case Study of Multicultural Group Work in a Japanese University" | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>International Comparative Literature   | 6. 最初と最後の頁<br>489-504 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)  | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森山新  | 4. 巻<br>17          |
| 2. 論文標題<br>間文化的シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析 - 民主的文化のための能力の参照枠 (RFCDC) の観点から - | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>25-38 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                                      | 国際共著<br>-           |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>森山新  | 4. 巻<br>10         |
| 2. 論文標題<br>東アジアが共に生きるためのシティズンシップ教育: ABCモデルに基づいた教育実践からの考察 | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>高等教育と学生支援                                      | 6. 最初と最後の頁<br>1-14 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                           | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                    | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>OYAMA, M., & YAMAMOTO, S.  | 4. 巻<br>12(1)       |
| 2. 論文標題<br>Pluralistic Approaches for Japanese University Students Preparing to Study Abroad | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>European Journal of Language Policy  | 6. 最初と最後の頁<br>29-53 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.3828/ejlp.2020.3  | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)   | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>李曉燕   | 4. 巻<br>7             |
| 2. 論文標題<br>センシティブな話題とシチズンシップ教育の可能性 共創学部のGlobal Seminarの事例研究 | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>九州大学基幹教育紀要  | 6. 最初と最後の頁<br>117-129 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                              | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                      | 国際共著<br>-             |

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>森山新   | 4. 巻<br>9          |
| 2. 論文標題<br>東アジアのインターカルチュラル・シチズンシップ教育としての複言語・複文化教育プログラム: その成果と課題 | 5. 発行年<br>2019年    |
| 3. 雑誌名<br>高等教育と学生支援   | 6. 最初と最後の頁<br>1-11 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                  | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                          | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森山新  | 4. 巻<br>16          |
| 2. 論文標題<br>間文化的シチズンシップ教育としての日本語教育: 第10回日韓大学生国際交流セミナーでの韓国側学生の変容より | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>67-79 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                   | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                           | 国際共著<br>-           |



|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>山本 冴里  | 4. 巻<br>7          |
| 2. 論文標題<br>自律的な外語学習を支えるクラスの実践報告 ひとつの教室で10を超える言語が学ばれるとき | 5. 発行年<br>2019年    |
| 3. 雑誌名<br>複言語・多言語教育研究                                  | 6. 最初と最後の頁<br>1-10 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                         | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                  | 国際共著<br>-          |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>山本 冴里   | 4. 巻<br>17          |
| 2. 論文標題<br>Citizenshipの育成は、第二言語教育とどのように関わるか 汎ヨーロッパレベルでの議論の経緯とその達成 | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>言語文化教育研究  | 6. 最初と最後の頁<br>53-70 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                                    | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                             | 国際共著<br>-           |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>森山 新                          | 4. 巻<br>15            |
| 2. 論文標題<br>日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割 | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>人文科学研究                        | 6. 最初と最後の頁<br>121-134 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)   | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計37件(うち招待講演 18件/うち国際学会 19件)

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山 新                              |
| 2. 発表標題<br>第11回国際学生フォーラムは民主的文化のための能力向上に寄与したか |
| 3. 学会等名<br>シティズンシップ教育研究大会2022                |
| 4. 発表年<br>2022年                              |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新                                 |
| 2. 発表標題<br>韓国と日本：過去克服と和解のために                   |
| 3. 学会等名<br>お茶の水女子大学韓国同門会第1回国際学術発表会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2022年                                |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新                              |
| 2. 発表標題<br>韓国と日本：過去克服と和解のために                |
| 3. 学会等名<br>韓日新時代フォーラム2022年9月月例会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2022年                             |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>森山新               |
| 2. 発表標題<br>韓国と日本：過去克服と和解のために |
| 3. 学会等名<br>釜山外国語大学校講演会（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2022年              |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>森山新               |
| 2. 発表標題<br>韓国と日本：過去克服と和解のために |
| 3. 学会等名<br>啓明大学校講演会（招待講演）    |
| 4. 発表年<br>2022年              |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>森山新               |
| 2. 発表標題<br>韓国と日本：過去克服と和解のために |
| 3. 学会等名<br>同徳女子大学校講演会（招待講演）  |
| 4. 発表年<br>2022年              |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山田穂乃佳、李暎燕                                       |
| 2. 発表標題<br>日本に暮らす外国人と日本人の相互理解のプロセスの解明 - K 大学の交流サロンを事例として - |
| 3. 学会等名<br>2022外国語教育と文化シンポジウム                              |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新  |
| 2. 発表標題<br>間文化的シティズンシップを育む日韓合同遠隔授業の成果と課題：民主的文化のための能力の観点から |
| 3. 学会等名<br>シティズンシップ教育研究大会2021                             |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>山本冴里   |
| 2. 発表標題<br>「民主的な文化」を担う市民の言語能力とは - RFCDC（民主的な文化のための能力参照枠）に描かれたもの - |
| 3. 学会等名<br>第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）                             |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>李曉燕  |
| 2. 発表標題<br>「世界公民」と「民主的シティズンシップ」 - 中国の外国語教育の「新国家基準」に注目して |
| 3. 学会等名<br>第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）                   |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新  |
| 2. 発表標題<br>超国家的視点からの民主的シティズンシップ教育をめざす国際学生フォーラム - 海外参加者の変容を中心に - |
| 3. 学会等名<br>第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）                           |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>Reconsideration of Peace Education Focusing on World War II and the relationship between the US and Japan |
| 3. 学会等名<br>第11回国際学生フォーラム（招待講演）   |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>Establishing a global environment for all world citizens to live comfortably: Consideration of COVID-19 from a global perspective |
| 3. 学会等名<br>第10回国際学生フォーラム（招待講演）   |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新  |
| 2. 発表標題<br>シティズンシップ教育としての国際学生フォーラム分析: コスモポリタン・シティズンシップの観点を中心に |
| 3. 学会等名<br>シティズンシップ教育研究大会2020                                 |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山本 冴里   |
| 2. 発表標題<br>教室に、自分のなかに、複数言語を響かせるー「二重の単一言語主義」への抵抗                                |
| 3. 学会等名<br>国際研究集会 ひとつの言語教育から複数の言語教育へ: CEFRからみた日本語, 英語, 外国語教育の連携と協働(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年<br>2020年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>李曉燕  |
| 2. 発表標題<br>絆・ギャップとシティズンシップの変容 外国人保護者のPTA役員のインタビュー調査から |
| 3. 学会等名<br>シティズンシップ教育研究大会2020                         |
| 4. 発表年<br>2020年                                       |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>間文化的シティズンシップ教育としての日本語教育と教師の役割: 第10回日韓大学生国際交流セミナーの実践より |
| 3. 学会等名<br>シティズンシップ教育研究大会2019                                    |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育：理論と実践                 |
| 3. 学会等名<br>JAPANESE LANGUAGE EDUCATION SEMINAR (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2020年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>Establishing a global environment for all world citizens to live comfortably: Consideration of environmental problems from a global perspective |
| 3. 学会等名<br>第9回国際学生フォーラム (招待講演)   |
| 4. 発表年<br>2020年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新                         |
| 2. 発表標題<br>グローバル時代に求められる日本語教育について考える   |
| 3. 学会等名<br>モンゴル教育大学公開講演会 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2019年                        |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新                         |
| 2. 発表標題<br>グローバル時代の外国語教育               |
| 3. 学会等名<br>モンゴル教育大学公開講演会 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2019年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>山本冴里・富本浩一郎                               |
| 2. 発表標題<br>あらゆる言語を価値づける 年少期における『言語への目覚め活動』教材作成・試用報告 |
| 3. 学会等名<br>第32回日本語教育連絡会議（国際学会）                      |
| 4. 発表年<br>2019年                                     |

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>李曉燕                    |
| 2. 発表標題<br>多文化と我々の未来              |
| 3. 学会等名<br>中国海洋大学招待講演（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2019年                   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>李曉燕                                      |
| 2. 発表標題<br>グローバルシティズンシップ教育としての第二言語教育 九州大学の実践を例に     |
| 3. 学会等名<br>多文化研究と異文化理解教育の国際シンポジウム（山東大学）（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2019年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Li Xiaoyan   |
| 2. 発表標題<br>Japanese Language Support for Foreign Parents Leading to Community Cohesion  |
| 3. 学会等名<br>The International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS) 25th Conference 2019, Masaryk University, Bron, Czech Republic（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新   |
| 2. 発表標題<br>外国語教育から世界レベルのシティズンシップ教育へ：東アジア、そして世界がともに生きるために |
| 3. 学会等名<br>第8回国際学生フォーラム（招待講演）                            |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新                          |
| 2. 発表標題<br>シティズンシップ教育としての複言語・複文化プログラム分析 |
| 3. 学会等名<br>第2回日韓学生フォーラム（招待講演）           |
| 4. 発表年<br>2018年                         |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新  |
| 2. 発表標題<br>東アジアが共に生きるためのシティズンシップ教育：ABCモデルに基づいた授業実践からの考察 |
| 3. 学会等名<br>言語文化言語教育学会第5回年次大会                            |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>森山新                          |
| 2. 発表標題<br>シティズンシップ教育としての複言語・複文化プログラム分析 |
| 3. 学会等名<br>ヴェネツィア2018日本語教育国際研究大会（国際学会）  |
| 4. 発表年<br>2018年                         |



|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>森山新                               |
| 2. 発表標題<br>対話による日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割 |
| 3. 学会等名<br>ヴェネツィア2018日本語教育国際研究大会（国際学会）       |
| 4. 発表年<br>2018年                              |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山本冴里  |
| 2. 発表標題<br>民主的なCitizenshipの育成は言語教育とどのように関わるか：欧州における議論の経緯・達成と、東アジアへの応用可能性 |
| 3. 学会等名<br>ヴェネツィア2018日本語教育国際研究大会（国際学会）                                   |
| 4. 発表年<br>2018年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>有田佳代子・新井久容・志賀玲子・渋谷実希・山本冴里                                     |
| 2. 発表標題<br>市民性形成のために、日本語教師が『多数派』に提案する対話教育の方法 『多文化社会で多様性を考えるワークブック』の理念と実際 |
| 3. 学会等名<br>言語文化言語教育学会第5回年次大会   |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>李曉燕                         |
| 2. 発表標題<br>多文化グループワークによるシティズンシップ教育     |
| 3. 学会等名<br>ヴェネツィア2018日本語教育国際研究大会（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2018年                        |

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>山本 冴里              |
| 2. 発表標題<br>「向こう側」と「こちら側」のあいだで |
| 3. 学会等名<br>第8回国際学生フォーラム（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2019年               |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>山本 冴里                       |
| 2. 発表標題<br>複言語、複文化の人々が行きかう場所へ：東アジアに見る夢 |
| 3. 学会等名<br>山口大学東アジア国際学術フォーラム           |
| 4. 発表年<br>2018年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>山本 冴里  |
| 2. 発表標題<br>Transnational and Translingual Collaboration Among Language Teachers in Northeast ASIA |
| 3. 学会等名<br>Language, Individual & Society;12th International Conference（国際学会）                     |
| 4. 発表年<br>2018年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>李曉燕                          |
| 2. 発表標題<br>暗黙知の共有と価値の共創 言語文化教育のあり方を考えるー |
| 3. 学会等名<br>批判的言語教育国際シンポジウム（国際学会）        |
| 4. 発表年<br>2018年                         |

〔図書〕 計6件

|                               |                 |
|-------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>佐藤慎司ほか編著、森山新・山本冴里他著 | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>明石書店                | 5. 総ページ数<br>336 |
| 3. 書名<br>ことばの教育と平和            |                 |

|                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>山本冴里       | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>くろしお出版     | 5. 総ページ数<br>205 |
| 3. 書名<br>複数の言語で生きて死ぬ |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>李曉燕・山本冴里                     | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>くろしお出版                       | 5. 総ページ数<br>232 |
| 3. 書名<br>学校プリントから考える 外国人保護者とのコミュニケーション |                 |

|                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>山本冴里他      | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>くろしお出版     | 5. 総ページ数<br>183 |
| 3. 書名<br>複言語教育の探究と実践 |                 |

|                                    |                 |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>山口大学大学院東アジア研究科、石井由理、山本冴里 | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>溪水社                      | 5. 総ページ数<br>208 |
| 3. 書名<br>成長するアジアにおける教育と文化交流        |                 |

|                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>有田佳代子・新井久容・志賀玲子・渋谷実希・山本冴里 | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>研究社                       | 5. 総ページ数<br>176 |
| 3. 書名<br>多文化社会で多様性を考えるワークブック        |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|   |
|---|
| <p>MY KAKEN RESEARCH<br/> <a href="https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/2kaken.html">https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/2kaken.html</a></p> |
|---|

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                       | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                   | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 山本 冴里<br><br>(YAMAMOTO SAERI)<br><br>(00634750) | 山口大学・国際総合科学部・准教授<br><br><br><br>(15501) |    |

6. 研究組織（つづき）

|                   | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                  | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                | 備考 |
|-------------------|--|--------------------------------------|----|
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 李 曉燕<br><br>(Li Xiaoyan)<br><br>(70726322) | 九州大学・共創学部・准教授<br><br><br><br>(17102) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

|                                |                    |
|--------------------------------|--------------------|
| 国際研究集会<br>北東アジア言語教育研究会第1回研究発表会 | 開催年<br>2019年～2019年 |
| 国際研究集会<br>北東アジア言語教育研究会第2回研究発表会 | 開催年<br>2023年～2023年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |